

令和元年6月3日現在

機関番号：43924

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K17373

研究課題名(和文)「文検図画科」の研究

研究課題名(英文)A study of secondary school drawing teacher's certificate

研究代表者

亀澤 朋恵 (Kamezawa, Tomoe)

愛知江南短期大学・その他部局等・講師

研究者番号：60736239

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、戦前期に行われていた「文部省師範学校中学校高等女学校教員検定試験」の「図画科」(以下、「文検図画科」と略記する)について、(1)「文検図画科」の試験の枠組み(2)検定委員(3)試験問題の分析(4)受験者(修学歴、受験動機、受験勉強の様子、合格後のキャリアの実態)、これら四つの観点から分析し、当該制度下における諸相の内実を明らかにした。戦前期の中等教員養成の制度の全体像の解明および、中等図画教育の実態解明のための示唆を寄与するものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義はおもに二つ挙げられる。一つは、「文検図画科」に焦点を当て、当該制度下における図画科の中等教員の養成・創出ルートに関わる諸相を明らかにし、「文検」研究および戦前期の中等教員養成制度の全体像の解明に貢献することができたことである。いま一つは、試験問題の背後にある求められた図画教員の資質の内実、受験勉強の様子から示唆される図画教員の力量形成の過程を明らかにし、戦前期の中等図画教育の実態解明に寄与しうることである。

研究成果の概要(英文)：This study examined the secondary education teacher certification examination in drawing of the early 20th century.

This study analyzed it from the four viewpoints (1) System of the examination. (2) The Certification committee. (3) Analysis of the examination questions. (4) The reality of the examinee (educational background, examination motive, study for the examination, carrier after the pass).

This study gave suggestions to elucidate unexplained parts of the history of teacher training system and the drawing education of secondary education in the pre-war.

研究分野：教育学

キーワード：教育史 教員養成史 教員検定 中等図画教育 美術教育史 「文検図画科」

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

「文部省師範学校中学校高等女学校教員検定試験」(以下、「文検」と略記する)は、師範学校以外にも多様に存在した、戦前期の中等教員養成・創出ルートの一つである。1885(明治18)年に試験が開始され、途中中断を挟みながら1949(昭和24)年に制度が廃止されるまで60年あまり実施された。その間、受験者総数約26万人、そのうち合格者は約2万人、合格率は約10%の難関であり、独学者の登竜門としても知られていた。

戦前期の教員養成および創出は、師範学校だけで行われていたわけではないという事実は教育界においても周知され、その全体像を解明するためにも「文検」の研究の必要性が指摘されていた。「文検」研究は、1990年代以降、寺崎昌男・「文検」研究会らが大幅に「文検」研究を推進し、『「文検」の研究 文部省教員検定試験と戦前教育学』(学文社、1997年)、『「文検」試験問題の研究 戦前中等教員に期待された専門・教職教養と学習』(学文社、2003年)が公刊され、『「文検」の姿が見えてきた』(吉田文『「文検」試験問題の研究 戦前中等教員に期待された専門・教養と学習を読んで』、『日本教育史研究』第23号、2004年、150頁)と成果が認められるようになった。

その後、寺崎・「文検」研究会らは活動を休止したが、2000年代以降も個々の研究者によって継続的に研究が進められてきており、著作としては、井上えり子による「文検家事科」を検討した『「文検家事科」の研究 文部省教員検定試験家事科合格者のライフヒストリー』(学文社、2009年)も公刊された。しかしながら、未検討の学科目は多く残されており、「文検」の全体像の解明には現在も至っていない。本研究は、「文検」研究において未検討の学科目の一つである「図画科」に着手したものである。

2. 研究の目的

本研究の目的は「文検」の「図画科」(以下「文検図画科」と略称する)の全体像を明らかにすることである。具体的には、試験が実施されていた1885(明治18)年から1949(昭和24)年までの全ての期間を対象とし、「文検図画科」の制度的な枠組み、検定委員の特定とその変遷、試験問題の特質とそこで求められた中等図画教員の資質の内実、受験者の修学歴や受験動機、受験勉強の様子やその後の進路など、当該制度が影響を及ぼした諸相について、それぞれの実態を明らかにする。

3. 研究の方法

本研究において、(1)「文検図画科」の制度(2)検定委員(3)試験問題の分析(4)「文検図画科」の受験者像、これらの四つの分析視点を設定し、それぞれ文献資料の収集と分析を主な作業課題として遂行した。

統計資料は、『文部省年報』から記録が確認できる1895(明治28)年~1940(昭和15)年までを収集した。文部省の告示や合格発表、検定委員の発表は、『官報』から収集した。受験体験記は、「文検」受験雑誌である『文検世界』、『文検受験生』のほか、教育関連の雑誌から適宜収集した。試験問題は、「文検図画科」受験参考書である小堀宇市『文検受験用図画科研究者のために』(大同館書店、1926年)井口巨・清水傳吉『図画科受験準備の指導』(啓文社、1928年)などの巻末に収録されていた過去問題集を中心に、先述の『文検世界』、『文検受験生』のほか、『文部時報』等から収集した。

4. 研究成果

(1)「文検図画科」の制度

「文検図画科」の制度について、法令の変更による試験制度の変遷の過程、各年の『文部省年報』から集計した受験者の総計、『官報』から集計した合格者の出願道府県から見える受験者の量的な特徴から明らかにした。

「文検図画科」の制度的な特色は、受験区分が中等諸学校の教授要目と枠組みが異なっていたことである。教授要目では「自在画」および「用器画」と定められていたが、受験区分では「自在画」の部分が「日本画(毛筆画)」と「西洋画(鉛筆画)」に分けて、いずれか一方を選択して出願が可能であった。そのため、免許状が「図画」のほか、「日本画(毛筆画)用器画」および「西洋画(鉛筆画)用器画」の2種類の部分免許状があり、合計3種類存在した。

試験科目は「日本画(毛筆画)」「西洋画(鉛筆画)」「用器画」「図案」「教授法」の五つであった。教授要目上で「自在画」に含まれる「図案」は、「日本画(毛筆画)」および「西洋画(鉛筆画)」の試験のなかでそれぞれ行われ、「教授法」は本試験の最終日に口頭試問という形式で行われた。

受験者の統計的な特徴は、記録が確認できる『文部省年報』1885(明治18)年~1940(昭和15)年までを検討した。この間の出願者総数は10,001名、合格者数は940名であり、合格率は約10%であった。

受験区分別の出願者数は、「日本画(毛筆画)用器画」が約20%、「西洋画(鉛筆画)用器画」が約70%、「図画」は約10%であり、「西洋画(鉛筆画)用器画」が圧倒的に多数であった。なお、出願者数は1907(明治40)年前後に「日本画(毛筆画)」と「西洋画(鉛筆画)」が逆転しており、当時の図画教育の事情を如実に反映していた。

免許状取得者の割合を「文検図画科」と高等師範学校などの「直接養成」、指定学校・許可学

校などの「無試験検定」と比較すると、「文検図画科」が約20%、「直接養成」が約24%、「無試験検定」約56%であり、「文検図画科」による免許状取得者が全体の2割を占めていたことが明らかになった。

合格者は『官報』にて発表された。それらを集計すると、合格者が多い出願道府県と性別には量的な特徴が認められ、出願道府県は「東京府」が全体の約20%を占め、性別では約95%が男性であった。

本研究では表層的に合格者の量的な特徴を言及するにとどまったが、今後の検討につながる二つの課題が挙げられる。一つは図画における学習環境の地域差、または人口移動等が推測されること。もう一つは教育内容や学習環境における男女差が示唆されることである。高等師範学校などの直接養成、無試験検定の検討の際にも、重要な分析視点となるであろう。

(2) 検定委員

「文検図画科」の検定委員を務めたのは、東京美術学校や東京高等師範学校などで中等図画教員養成に関わっていた教員たちであった。彼らの多くが当時の図画教育界を牽引する立場であり、官展でも活躍する優れた作家でもあった。さらに、中等教員の経験者が半数を占めていたことも特徴的であった。検定委員は各科目の試験問題の作成と採点、本試験における「教授法」において口頭試問を担当した。

担当科目別では「日本画(毛筆画)」および「用器画」は東京美術学校の教員が担当し、とくに図画師範科において図画教員養成に関わっていた人たちであった。「日本画(毛筆画)」の代表的な委員は、白浜徹、荒木悌二郎、松田義之が挙げられる。「西洋画(鉛筆画)」は東京高等師範学校の教員たちであり、とくに明治前期においては美術史上、洋画旧派に属する画家達でもあり、大正期中盤以降は彼らに教えを受けた画家らが後継を務めた。「西洋画(鉛筆画)」の代表的な委員は、渡辺文三郎、小山正太郎、石川寅治が挙げられる。「用器画」は、第一高等学校と東京美術学校の両方で教えた小島憲之の存在が大きい。彼は「文検図画科」において1894(明治27)年から1918(大正7)年まで26年におよぶ最長の任期を務めた。彼の後継には東京美術学校での教え子にもあたる鈴木信一、平井富夫が務めた。

以下の試験問題の分析には、上に挙げたの委員の出題に焦点を当て、それ以外の委員の出題については本研究では検討しないものとする。

(3) 試験問題の分析

受験科目であった「日本画(毛筆画)」「西洋画(鉛筆画)」「用器画」「図案」「教授法」の各試験問題について、先行研究の検討手法を踏まえ、第1に検定委員(すなわち彼らの専門や学問背景)との関連、第2に教授要目(すなわち教育現場)との関連、という二つの視点から検討した。その結果、各科目に共通した特徴が見いだせた。なお、「教授法」については、口頭試問であったことと、試験問題がほかの4科目ほど残存していないという事情もあり、現在までに収集した資料の限りにおいて復元し、年代ごとの傾向を指摘するにとどまっている。

試験問題の特徴は、第1に検定委員との関連については、いずれの科目も委員の交代に伴って試験問題に変化が見られ、両者の関連が認められた。第2に、教授要目との関連について、予備試験は教授要目では低学年に定められている内容、本試験は高学年に定められている内容が出題される傾向があり、予備試験から本試験と段階を踏んで出題されていた。総体的に、いずれの試験においても教育現場での実践を踏まえ、ものを正確に描く技術が求められていたことが明らかになった。

以上のことから、検定委員ごとに出題の特徴は認められるが、各委員の専門や学問背景に偏向するのではなく、教授要目から大きく逸脱するものではなかったといえる。先行研究において、「文検」の試験問題は、学科目ごとに異なるものの、出題者である検定委員の背景にあるアカデミーの動向が反映するという傾向が指摘されていたが、「文検図画科」についてはそれが該当しない事例であったといえよう。

本研究では検定委員と教授要目の二つの視点から、おおまかな全体像をとらえたものにとどまった。今後の課題としては、教科の背景にある個々の学問史(おもに美術史)との関連、高等教育(美術の専門課程や高等学校)との関連や比較、とくに「用器画」では受験生の間でよく読まれていた図学の参考書との比較検討等、学問史的な観点からの検討に課題が残されている。それに加え、試験問題の「教授法」についても詳細な検討を要する。

(4) 「文検図画科」の受験者像

「文検」受験雑誌である『文検世界』、『文検受験生』等を中心に収集した受験体験記359件を分析し、『文部省年報』の統計から見えてこなかった具体的な受験者像を明らかにした。ここから見えてきた「文検図画科」の受験者の姿は、修学歴は師範学校卒業、絵を描くことが好き(中には画家志望だった)男性の小学校教員であった。

受験動機としては、絵を描く自由が欲しい、換言すれば絵を描きながら生活を安定・向上させたいという理由が最も多かった。「文検教育科」の場合、受験動機は自己を高めるためという自己修養的側面が強かったのに対し、ほかの学科では資格取得のためや地位の向上といったstatus-seeking的な受験動機が目立つ傾向にあった。「図画科」の受験動機は後者であったといえる。そして、「文検図画科」受験時点の動機において、教育そのものにはあまり関心が高くない

いという特徴も明らかになり、戦後議論になった「でもしか教師」とも受け取れる教師像がすでに存在していたことが示唆された。

受験勉強は基本的には独学での練習であったが、技術の上達のためには指導者の存在が不可欠であったため、学習ネットワークづくりが活発であった。その学習ネットワークの一つであり、最も高い人気を誇った「緑陰社」は、「文検図画科」合格者の有志によって1927（昭和2）年頃に発足された全国規模の組織であった。同社は今日で言うところの美術系大学受験予備校のような直接指導のほか、通信教育も行っていった。特筆すべき同社の最大の特色は、現役の検定委員から直接指導が受けられるというものであった。検定委員から日常的に指導を受けられるという様態は、これまでの先行研究で明らかになったほかの学科目では類を見ない事例であった。

「文検図画科」の受験者のライフヒストリーとして、大分県師範学校教諭・武藤完一に着目して検討した。武藤に着目したのは、彼は図画教員としてだけでなく、大分を代表とする版画家としても著名であり、「文検図画科」受験の指導者としても評価が高いという希有な人物であったからである。

武藤は中学校中退後画家を目指していたが、途中で教員へ転身した。中等教員になってからも教育現場だけにとどまらず、版画家、「文検図画科」受験指導として個人指導のほか、本を出版するなど多方面で活躍した。「文検図画科」の受験指導者としての武藤は、熱心な指導で後輩の受験者からも慕われていた。その熱心さのあまり、勤務先である師範学校の生徒にも「文検」受験を奨励したことで、一部生徒からの反発もあったという逸話も残されていた。「文検」出身の教員のなかには、自ら「文検」出身とは言いたがらない者も少なくなかったが、武藤は自身の努力で進路を切り開いてきたという自負から、「文検」をむしろ肯定的にとらえていたようであった。

受験生の実態における今後の課題を挙げたい。「文検図画科」受験者のライフヒストリー研究は、中等図画教育の現場の実態を明らかにする上で示唆に富むものである。武藤のほかにも注目し得る人物が何名か散見され、彼らについても検討を進める必要がある。

また、受験をめぐる学習ネットワークの実態について、「緑陰社」のほかの団体の存在も示唆される。資料的な限界は予期されるものの、継続的な調査を要する。

（5）その他

資料収集の過程で、これまで所在不明であった『図画教育通信』の一部を発見し、本研究の過程において部分的に目次を一覧化してまとめることができた。戦前期の図画教員の図画教育観、教育実践の実態、図画教員のキャリアの形成過程に示唆を与える資料であり、今後も継続して調査する必要がある。

5．主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

亀澤朋恵、受験体験記からみた「文検図画科」の受験者像、美術教育学研究、査読あり、第49号、2017.3、pp.129-136

DOI: <https://doi.org/10.19008/uaesj.49.129>

亀澤朋恵、『図画教育通信』目次（1）—第168信（大正10年10月1日）～第204信（大正14年10月1日）—、愛知江南短期大学紀要、査読なし、第48号、2019.1、pp.41-54

<http://www.konan.ac.jp/library/bulletin.html>

亀澤朋恵、「文検図画科」試験問題の研究—「図案」の場合—、美術教育学研究、査読あり、第51号、2019.3、pp.145-152

〔学会発表〕(計1件)

亀澤朋恵、「文検図画科」試験問題の研究 「図案」の場合、第57回大学美術教育学会奈良大会、2018

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

(該当なし)

取得状況(計0件)

(該当なし)

〔その他〕

ホームページ等

6．研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。